野村 訓

校の折れた木

変わりたい 想い込め

った。家だけの生活が、再び始まった。

少女の母親に呼ばれて家に行った。デジカメで、身近な被写体を撮影していた。「大胆で上手だね」と言うと、青白い顔がおびえ震えた。「…今は無理」

った友達が次々と登場する話をする少女の瞳に、押されそうになった。やがて、身近で信頼していた女子の友達が離れていき、その集団に居づらくなり「ポツン」と独りでは居られなくなったと言う。

学校の先生は誰も気付かず、学校の存在が彼女から消えていき、

カメラの知識が全くない遊びの写真に、枝が折れた木の写真があった。傷ついた少女の痛みが、ぐさりと突き刺さった。少女の母親は、たくましい父親にも見えた。そんな母親と、少女の会話がはずんだ。

「遊園地行ってジェットコースター一緒に乗って、大声出そうや」と少女。「ちっちゃい時に一緒によく行ったの、覚えてる?」と母親が言うと、「みんな覚えてる」。少女の顔に血色が戻り、独演会が始まった。学校で親しか

気付けば家に居た。そして家で自分のSOSを発信したが、返信がなかった…。こうした過去のわだかまりを打ち明けてくれた。

少女の父親は仕事で不規則な生活を送り、いつもピリピリして近づけなかったらしい。父親は家には居たが、「不在」だった。「今の自分は嫌だ。変えたい」。少女の魂の言葉だった。彼女の写真には、不屈の想(おも)いが満ちあふれている。彼女に、社会へ飛び立つ翼をください。

(写真家)

とあるよ」

「海外進学」の可能性を見据えて

西沢 めぐみ

進路指導 広い視野で

日本と費用同等 異文化交流 大きく成長

近年は海外に出る若者が減るなど、その内向き志向が指摘されています。一方、企業では社内の公用語を英語にしたり新入社員を海外赴任させたりと、グローバル人材を求めるようになっています。政府も「新成長戦略」の中で、留学や研修で海外交流を図る学生らの数を30万人に増やす目標を打ち出したところです。

私は20年以上、海外留学カウンセラーとして延べ1万人超の相談に応じてきましたが、留学に関心を持つ若者の数は今もそれほど減ってはいません。むしろ周囲の無理解が壁になっているようなケースが少なくありません。まずは親御さんや教育関係者の皆さんに、「海外進学」について正しく理解していただきたいと思います。

ここで言う海外進学とは、海外の大学に入学し、現地の学生と一緒に学び、必要単位を取得して卒業すること。短期の語学留学やワーキングホリデーなどとは異なります。

私が海外進学を勧めるのは、言葉もあまり通じず、知人や友人もいない環境で数年間、懸命に勉強することで、主体性や積極性、行動力が培われるからです。人に話し掛けられなかった内気な若者がどんどん積極的になり、自分の夢を前向きに追い掛けるようになったケースをたくさん見てきました。語学力が磨かれるのはもちろん、異なる価値観や文化的背景を持つ人々との触れ合いで、本物のコミュニケーション力や交渉力が身に付くのです。

もう一つ強調したいのは、海外進学は決して裕福な家庭に限られた「特権」ではないということ。最近の円高で留学費用は数年前に比べ驚くほど安くなっています。例えば、英国の大学は学費と生活費を含め年間250万円程度で行けますし、米国の州立大の中には同じく年間150万円程度で済むケースもあります。日本で下宿やアパート生活をしながら大学に通うのと、さほど変わらない水準なのです。

ある有名進学校の教頭先生とお話ししたとき、「東大や京大を目指す生徒ではなく、グローバルな舞台で活躍できる人材を育てていきたい」と強調されていました。確かに資源の乏しい日本にとって、人材こそが成長の原動力。親御さんや教育関係者の皆さんには、若者を育てる有力な選択肢として海外進学を捉え、広い視野で進路指導に当たってほしいと願っています。

(地球の歩き方T&E「成功する留学」チーフカウンセラー)

にしざわ・めぐみ 1957年札幌市生まれ。米ブリガムヤング大卒。外資系企業に勤務後、通算10年間、米国に滞在。アイビーリーグを含め複数の大学で学ぶ。学生や社会人対象に海外留学カウンセラー活動を続ける。著書に「世界に飛びだそう!目指せ!グローバル人材」。